

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105 浜松市北区三方原町2709-12

発行人：稲松義人

つばさ静岡

〒420-0805 静岡市葵区城北117

電話：054-249-2830 FAX：054-249-2831

E-mail tubasa-szok@wind.tnc.ne.jp

H.P http://www.tsubasa-szok.net/

印刷所：株式会社アブライズ

定 価：一部30円

号 外 2011年6月20日

つばさ静岡での6年間で学んだ

「ひととこれから」の課題

医務部長 浅野一恵

つばさ静岡で重症児者の方々の医療に携わり6年が経過し、多くのことを利用者の方々から教えていただいた。

その中で最も痛感させられたのが「医療の功罪」である。私たち医師がこれまで障害をもった方々に行なってきた医療は、ともすれば「医療のための人生」を強いてしまっていたのではない。肺炎の予防のために、経口摂食を中止し経管栄養や吸引を行なうことで、本当に苦痛は軽減できたのだろうか。てんかんの薬物治療により発作は軽減したかもしれないが、副作用で嚥下障害や呼吸抑制をもたらし、覚醒している時間を減じ、五感からの多くの刺激や他者と触れ合う時間（とき）を奪ってきたのではなかったか。筋緊張にこめられた意味を解釈することなく表面上の筋緊張を抑制する治療を行うことで、彼らの精一杯の表出を奪ってはいなかったか。「彼らのため」というスローガンのもとで、一方的な医療者の思い込みを押し付けてこなかっただろうか。「彼ら＝重症児者」と一くくりにすることがすでに医療の奢であったように思う。目の前の「彼」が望む治療や人生は何なのかと問い続けることが、これからの私たちに求められることであらう。

医療は重症児者の方々の生活にとって実は脇役に過ぎないが、「彼」の訴えの解釈の仕方や医療介入の仕方、人生を大きく左右してしまう危険性があることを私たちは常に肝に銘じていなければならぬ。

「彼」の訴えの真意を受け止めるためには、多くの職種が「彼」と真正面から向き合い、「彼」の苦しみや喜びはどこにあるのかを感じ取り、各々が感じ取った「彼の思い」の解釈を忌憚なくぶつけ合い、共有しあい、修正しながら具体的な支援や治療を模索し続けることが必要であらう。つばさ静岡で今年度からスタートした「超重症児ゾーン」での「多職種による協働」はその足がかりとなる大きな第一歩であると感じている。「医療のための人生」から「人生のための医療」に変換できるよう、多職種で真剣に互いに考えあつていきたい。

これからの課題

1. 「彼」の苦痛を多面的（身体的、精神的、心理的）に分析し、客観化・言語化する

「彼」が泣いている時、その原因は身体的な痛みかもしれないし、心理的なやるせなさかもしれない。支援者はその泣きのあらゆる意味を追求していかねばならない。それが「彼」を本当に理解する手がかりになり、また一方でどうやっても理解しきれないという支援者自身の限界を知ることにつけにもなりうる。苦痛の原因

2.

を分析するプロセスを客観化して共有することによって、支援のあり方が変革する可能性があるため、この作業は私たちに大切な責務である。

「彼」の持っている能力を最大限に活かす支援を開発する

つばさ静岡でこの6年間取り組んできた「重症児者のための食形態の開発」は、「あるべき姿に彼を合わせる」のではなく「彼の求めている支援を私たちが提供すること」の大切さを痛感する機会となった。「彼」の持っている能力を最大限に活かす支援は「彼」が肯定され、尊重され、更なる成長を生む機会となるはずである。今後このスタンスを大切にして、私たちが行なう支援の一つ一つを見つめなおしていきたい。



つばさ静岡の

職員として

療育部長 鈴木良成

社会福祉法人小羊学園に就職して28年になります。今まで法人内にあるほとんどの事業所でお世話になり、利用者の皆さんと共に歩んできました。多数の利用者さんと出会い、関わりを持つことや医療、福祉分野での時代の流れなどを通じて、いろいろなことを経験させてもらいました。半世紀近く生きてくると、将来のことよりも今この時をどう生きるか、また自分に何ができるかをふと考えるようになってきました。

6年目に入り、つばさ静岡はまだまだ新たな歴史をこれから創っていく施設であると思います。地域のニーズに応え、地域の中で開かれた施設としての役割を果たしていくことが望まれていると思います。私も療育に携わる職員として自分たちの役割を理解し、利用者の支援に取り組んでいきたいと思っています。

利用者の個性を尊重し、利用者が望んでいることは何かを日々の支援の中から認識し、実践していくことが、充実した生活を送るうえで重要だと思っています。支援していくことについては御家族の皆さんとも、共有していきたいと考えます。利用者にとってつばさ静岡の暮らしが、安心して満足できるものになることを

を、さらにつばさらしさを飛躍させていくことを目標にしていきたいと思っています。穏やかな表情、顔をくしゃくしゃにした笑顔、何気なく目線が合う、肌で感じる返事、頑固な要求など、いろいろな関わりを通じて私は、満足を得ることを感じています。そして私たちの思いや働きかけ、行動が、伝わった時、さらに通じた時充実感を味わうことができると思います。共に支えあって生きていることを実感でき、どんな人でも生きている意味があることを確信しています。共に生きる社会が自然であるかのようになりたいたいものです。

新しい制度や社会情勢の中で考える課題、またそれぞれの事業所、家庭が抱えている課題も多いと思います。支え合いながら共に生きていく皆さんと、取り組んでいきたいと思っています。いろいろな声を聞かせてください。今後ともよろしくお願い致します。

つくしBの紹介

主任 澤松裕子

つくしBは人工呼吸器装着・気管切開・酸素投与などの呼吸管理、そして経管栄養管理など医療ケアを必要とする7歳から35歳までの利用者13名と、同じく医療ケアを必要とするショートステイ2

名を受け入れ、二つのリビングで生活しています。

日中はみんな集まってリビングで過ごしたり、散歩に出たりします。小学生の4名は訪問教育を受けています。

また変形予防・換気量アップのために腹臥位など、作業療法士・理学療法士を中心にリハビリも取り入れています。

入浴は皆さん大好きで、触れ合いを大切にしています。

動物園や水族館、ショッピングセンターなど可能な範囲で外出も楽しんでいます。心身ともに充実した生活を過ごして欲しいと色々計画しています。

つばさ静岡が開所から6年が経ち、未だ看護師不足・定着率の低さの問題と共に利用者さんに今まで以上の豊かな暮



らしの提供を、との思いから今年度より生活支援員3名が配置され新たな体制でスタートしました。

新職看護師3名も加わり、まだまだ試行錯誤の大変な日々ですが、一步一步良い方向に向かって取り組んでいるところです。

利用者さん職員ともに、笑顔で満足感の一日を、そしてお互いに育ちあう毎日を送っていききたいと思っています。

(看護師)

「オープンな」

いなほに

主任 石田有紀

いなほは、南棟西側にあるゾーンです。

他のゾーンとは違い、二つのリビングに分かれており、5名5名計10名の方が生活しています。自力で動くことのできる方が多く、それぞれが出す活発さや、元気さ、個性にお互いが刺激したり影響しあったりし、ゾーンみんなで引っ張りあったり、引っ張られたりしながら毎日充実した時を過ごしています。

日課として、2つのグループに分かれ紙すきとフェルトの活動を週3回、年間を通して継続的に行っています。それぞれが役割や活躍する場面、注目される場面があります。また、奥リビングの外は広

(支援員)

定年後には、少し働きながらどこかで

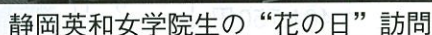
「あかね」に通い始めてしばらくした時から、これで何か役に立っているのだろうかとの思いがおこり、多少の迷いを抱きつつ1年が過ぎました。でも、役に立つ、そういう基準で考えてしまうことが間違いなのもかもしれません。友人を訪ねて話しに行く、ひとときを一緒に過ごす、そのことが自体が目的であるはず。

先週の帰り際に「バイバイ」と手を振ってくれたEさんが「そんなふうに考えないで、気軽に来てよ……」と言ってくれたように思います。「うん、また来週ね」

想を残してくれるのですが、実際に連絡をくれたのはAさんが初めてでした。「利用者と関わらせてもらう時間が大好きでこれからの活動でも利用者と関わりたい。食事の介助も手伝わせてもらってとても勉強になります。でも、お皿を洗ったり掃除をしたりすることも生活の一部だから是非手伝いたい。」と恥ずかしそうに、でもきつぱりと言うAさん。受け入れゾーンとの調整をし、隔週末にボランティアに入ってもらうことになりました。

ボランティア受け入れの目的は、利用者の暮らしが豊かになることです。直接

利用者に関わっていただくボランティアは大歓迎です。Aさんは「クリスマスのは装飾やランチづくりなど一つひとつの仕事がとても楽しく、素敵なパーティーだった。あの人は今こうしたいんだなということが解かるようになってきた。自分の中で確実な達成感と将来の夢を叶える為の向上心につながった」と一年間の感想を文章にしていました。受け入れプログラムに悩むことも多々あるのですが、間接的なお手伝いであっても、利用者に提供する物づくりや行事の雰囲気を楽しんでくれていたことが解かりました。そして何より、利用者の声や表情がボランティアさんに届けているものには魅力があるのだということを強く感じさせられます。Aさんからの申し出は、ボランティアの受け入れ担当をしている私にとつて大変嬉しい出来事でした。



食べる楽しさを届けます

届けます

平成22年度重症心身障害療育学会において、第6回読売療育賞の敢闘賞（読売光と愛の事業団）を受賞しました。

この栄冠に輝いたのは、府川栄養士や鈴木調理師が中心となって発表した、「まとまりペースト食」の開発についてです。

まとまりペースト食とは、口腔、咽頭に付着しにくいなめらかなペースト状の物ですが、まとまり感があるため形を作ることが出来ます。おいしさはもちろん、目で見て楽しめる食事です。

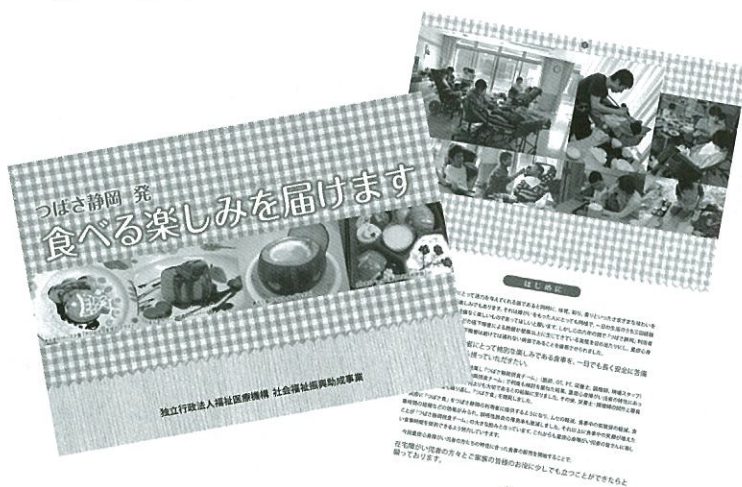
口腔機能が制限されている重症心身障害児者にとって、食形態に必要な要素は何かを考えていきました。そして、一回で飲み込むことが出来、咽頭内で崩れず、ゆっくり咽頭内を通過し、なめらかであることが食形態に必要であるとわかり、この「まとまりペースト食」の開発にこぎつけたのです。

昨年度、独立行政法人福祉医療機構の助成をいただき、重症心身障害児者の方々と、その介護にあたるご家族に向けて、『つばさ静岡発 食べる楽しさを届けます』という冊子を作成しました。これまでの考えをもとに、なぜ、食事に配慮が必要なのか、どのような点に気をつ

ければよいのか等、実際に提供しているペースト食の写真なども載せ、わかりやすくまとめてあります。

つばさ静岡の利用者さんだけでなく、在宅で生活されている方々にも、一日でも長く安全に、なにより楽しみながら経口で食事を召し上がって頂けたらと願っております。

そのためのお手伝いの一つとして、ご家庭でも簡単に、まとまりペースト食や胃ろう食が調理できるように、調理師による料理教室を開催しています。参加をご希望される方は、つばさ静岡までお気軽にお問い合わせください。



平成23年度 公益信託市川園社会福祉基金にてログハウスを設置しました。

A型通園事業「わたぐも」は在宅の重症心身障害者の日中活動を支援する場です。定員15名の事業ですが登録者数は30名を超え日々の利用者が定員を超えることがあります。このため様々なスペースが足りなくなってきたため、ログハウスの設置により少人数の活動場所として、また行事用品の収納スペースとして活用できるようにします。

大切に使用させていただきます。ありがとうございました。



事業費 1,233,972円
助成額 800,000円

職員募集

看護師

随時募集しています。

支援員

9月1日付採用者を募集します。
24年4月採用の募集要項が出来ました。

平成23年度 共同募金受配報告

通園部門「わたぐも」活動室に西日陽除けのテントを取り付けました。ありがとうございました。



平成22年度共同募金 1,050,000円
自己資金 351,750円
合計 1,401,750円

本年度の行事予定

9月3日(土) 夏祭り16時～19時 *
12月18日(日) 入所部門クリスマス *
12月23日(金) わたぐもクリスマス *
7月10日(日) 利用者のご家族有志によるイベント支援チャーム企画のコンサート
9月11日(日) *
11月20日(日) *

*印の各行事ではボランティアの協力をお願いしています。

編集後記

つばさ静岡のホームページを、時折更新しています。日常の様子を、写真もまじえて紹介しています。どうぞご覧下さい。